

市民の間で生まれる友情

スルタノフさんの孫娘リソラットさんと日星高校の生徒らは SNS で交流を続けており、市民の間でも友情の輪が広がっている。



引揚記念館を訪問する日本人抑留者記念館館長のスルタノフさん



▲アルトウルさんはウズベキスタンとの連絡や通訳のほか、料理教室やロシア語教室など文化交流も行う

2つの国を結んだ絆は、第二次世界大戦が生んだシベリア抑留に遡る。終戦後もソ連によって森林伐採や鉄道・道路の敷設、建築などの重労働に携わった日本人抑留者。彼らがウズベキスタンで建設した発電所や国立ナゾイ劇場は今でも現役で、故・カリモフ前大統領は日本人抑留者を「国づくりに貢献してくれた恩人」と讃えた。

舞鶴市は、戦後13年間にわたり引揚船を受け入れた「引き揚げのまち」として抑留・引揚の史実を継承する使命を担っている。市とウズベキスタンとの交流が飛躍的に加速するきっかけとなったのは2016年、ウズベキスタンで、日本人抑留者資料館を運営するジャリル・スルタノフさんの来日だった。引揚記念館では、志を共にする同館職員をはじめ、ウズベキスタンでの抑留体験者と面会。地域の中学・高校生とも交流した。

この友好の絆がホストタウンの登録でさらに深まることとなった。旧ソ連領や東欧は、もともとレスリングの強豪国が多い。市では、2015年に高校総体のレスリング競技開

催地となったことから、五輪メダリストをはじめ世界で活躍する選手を育てた指導者を舞鶴に迎えた。これをきっかけにレスリングが盛んになり、今では小学生・高校生まで多くの全国大会入賞選手を輩出するほどに成長している。柔道競技でも、文化公園体育館柔道場を拠点に柔道教室や大会を開催し、今年には市で初めて小学生全国大会出場選手も出た。引揚の縁から始まった友好の輪がスポーツに広がり、同国で多くの五輪メダリストを輩出しているレスリング・柔道競技の東京オリンピック事前合宿が決まった。

また、2017年にはウズベキスタンからレ・アルトウルさんを国際交流員として迎え、出前講座や広報まいづるでのコラムなどで同国の文化を紹介している。

さらに、交流を文化・経済分野にも広げようと、赤れんがパークでの大規模なウズベキスタン展開催や福祉施設の視察を受け入れるなど、オリンピックはゴールではなく、さらなる交流へ向けたスタートでもある。

産業・人材分野でも加速する交流

ウズベキスタンで日本語学校「NORIKO学級」の校長を務めるナジロフ・ガニェルさんが来日。介護人材交流に向けて介護施設などを視察した。介護だけでなく建設・農業などの分野での交流も目指しているという。



国際試合体験で選手に刺激

2017年にはウズベキスタンの文化スポーツ大臣や柔道・レスリング連盟の役員らが本市のスポーツ施設などを視察した。翌2018年には選手団が来日し、合同練習も行った。体格も大きい外国人選手との練習・試合体験は市内の若手選手にとっても大きな刺激となった。

日本×ウズベキスタン



友好の架橋



「オリンピック・レガシー」
IOC(国際オリンピック委員会)では長期にわたる良い影響のことで定義している。思い浮かぶのは、前回の東京オリンピックに伴う飛躍的な交通インフラの整備のような目に見えるレガシー(遺産)だが、IOCは有形・無形を問わず、開催都市・開催国へスポーツ、社会、環境、都市、経済の5つの分野で良い遺産を残すことをオリンピックの一つのテーマとしている。

ホストタウン構想もレガシーを国内に広く残すための取り組みだ。特に地方都市にとって、海外アスリートと交流できる機会や練習の規模・レベルに見合った施設の整備、言語や文化に問わず過ごしやすい多言語化やバリアフリー環境の整備は、まさにこの大会を起点に将来へ残るレガシーとなる。また、地元アスリートにとって海外オリンピックと一緒に練習や試合をするという体験や練習外に行われる市民との異文化・国際交流は人々の心に残る無形のレガシーだ。

舞鶴市はレスリング・柔道の2種目でウズベキスタンのホストタウンを務める。友情連携フェアプレーの精神を重んじ、平和に貢献するというオリンピックの意義にも通じる両国の育んだ交流の歴史と、広がる文化・スポーツの交流を紹介。